

武陵源と鳳凰

岩 井 純

I. はじめに

湖南省に位置する武陵源（ぶりょうげん）や鳳凰（ほうおう）を訪れたのは2012年8月中旬（14日～19日）で、ロンドンオリンピック（2012年7月27日から8月12日まで17日間に渡って行われた。開会式に先立って行われた2日間の男女サッカーの一部試合を含めると実質19日間になる）が終了した直後のことである。また、帰国後に見た朝日新聞（2012.8.20）では尖閣諸島をめぐる日中間の問題が大きく報じられていた。「19日、尖閣諸島（中国名・魚釣島）に上陸した香港の活動家が逮捕されたことに抗議する反日デモ」が中国23都市で行われ、一方、日本人「10人が19日午前8時前、船から泳いで魚釣島に上陸した。灯台付近で日の丸を掲げたり、灯台の骨組みには日の丸を張りつけたりした」という。しかし、旅行中、緊迫した日中間の雰囲気を感じさせられることは全くなかった。デモ隊が暴徒化し大規模な破壊・略奪行為を行うようになったのは筆者が帰国した後、尖閣諸島の国有化を閣議決定（9月10日）した後のことである。

今回の旅のガイドは伍佳氏であった。以下、伍佳氏の案内をもとに記してみる。

湖南省と滋賀県とは姉妹自治体の関係にある。湖南省は洞庭湖、滋賀県は琵琶湖と、両方とも湖のある土地であることから協定を結んだのであろう。現在27歳の伍佳氏は長沙の大学（日本語科）を卒業して、滋賀大学に4年間留学したという。日本語を専攻しても、それを生かすことのできる就職は困難らしい。外国語の中では英語を専攻した場合、比較的就職がしやすいという。伍佳氏は3番目の子供で、姉が2人いるという。一人っ子政策に反するので、2人目の姉が生まれると罰金を取られた。伍佳氏の場合は、2人目の姉の罰金の2倍の罰金だったという。なお、少数民族は、子供は2人まで認められている。伍佳氏の出身大学は滋賀大学と姉妹校だという。その関係で交換留学生として日本に留学した。交換留学の期間は1年間であるが、3年間延長したという。滋賀大学が国際交流協定を結んでいるのは湘潭大学である。伍佳氏が卒業したのは、湘潭大学と考えられるが、湘潭大学は長沙市に隣接する湘潭市にある。湘潭市は彦根市と姉妹都市であり、滋賀大学の本部は彦根市にある。

伍佳氏はもう少し長く日本に滞在したかったとのことだが、中国では両親の面倒は男の子がみるという習慣があり、帰国せざるを得なかったという。長沙には日本の企業は少なく、やむを得ず観光ガイドになったとのこと。考えてもいなかったガイドになって、4年目だという。

滋賀県のスーパーである平和堂が出資して建てた「湖南平和堂百貨店」は3号店までである。1998年に長沙市に「湖南平和堂百貨店」ができ、2007年にできた2号店も長沙市に開店した。2009年にオープンした3号店は長沙市ではなく、長沙市に隣接する株洲市に開設した。滋賀県の平和堂はスーパーであるのに、湖南平和堂は百貨店と言ってよからう。

II. 張 家 界

張家界空港から天子大酒店（EMPEROR HOTEL、張家界市武陵源区武陵大道）までは車で40分ほどの距離である。近代的なホテルであっても、トイレットペーパーをトイレに流さないようにしなければならない。トイレが詰まる恐れがある。

張家界市は、1994年4月4日、「大庸市」から改名した。現在、永定区・武陵源区・慈利県・桑植県を管轄下に置いている。1992年に世界自然遺産となった「武陵源自然風景区」は、「張家界（ちょうかかい）国家森林公园（南西部）」「索溪峪（さくけいよく）風景区（東部）」「天子山（てんしざん）風景区（北西部）」「楊家界（ようかかい）風景区（西部）」で構成されている。伍佳氏によると、張家界には「張」という姓が多いという。

張家界市は湖南省西北部に位置し、総面積は9500平方キロメートルを越える。160万人ほどの人口の約3分の2（70万）が少数民族である。少数民族の中では土家（トゥチャ）族が60%ほどと最大で、苗（ミャオ）族がそれに次いでいる。湖南省の西は四川省（ガイドは四川省と表現したが、重慶市に接しているというべきであろう）や貴州省に接している。

明日の天気予報は晴れであるが、山の天気は変わりやすい。風景区に入場する場合チケットを購入しなければならず、パスポートの呈示が必要なところもある。風景区は広く、移動はグリーンバスによる。その場合、グリーンバスの行き先を間違えないようにしなければならない。

今回の旅行では韓国人観光客の多いことが目に付いた。伍佳氏によると「張家界と韓国とは友好都市で、韓国から長沙までの直行便がある。張家界の役人が韓国に行き、観光客を誘致している」という。張家界と韓国河東郡は2005年に友好都市となり、互いに地方政府の幹部が訪問し合っている。ソウルから長沙まで直通便が運航されているだけでなく、期間限定ではあっても観光用直通チャーター機が張家界荷花空港と韓国の間を往復している。これを利用すると韓国の観光客は3時間で張家界を訪れることができるのである。

III. 武 陵 源 区

武陵源の街にはホテル・レストラン・お土産屋・劇場があり、地元の人は1万人ほどという。市街地は小さいので、車で移動すると数分間で目的地に行くことができる。「張家界・魅力湘西」大劇場は2010年5月1日にオープンした。張家界市武陵源区画卷路に位置しているこの劇場は高い人気があるという。この劇場ではトゥチャ族やミャオ族など少数民族の歌・踊り・雑技などのショーが行われる。ショーの始まりは19時30分、入場料は290元である。宿泊した天子大酒店（張家界市武陵源区武陵大道）から劇場までは、車で1～2分しかかからない。ショーの写真撮影は禁止とされているが、観客のほとんどは写真を撮っており、咎められることはない。ここでは中国少数民族、特に土家族・苗族・トン族・白族・瑶（ヤオ）族などの興味深い風俗習慣を演じている。「張家界・魅力湘西（Zhanjia・Charming Western Hunan）」大劇場は、文化部により「国家文化産業示範基地」に評定された。ショー（19:30～21:00）のうち、1時間15分は屋内で、15分は屋外で行われる。屋内で演じられるものには、例えば、「追愛」がある。湘西の瑶（ヤオ）族に伝わっていた、若い男性が階段を登って

若い女性の寝室に入り密会をするというストーリーが、踊りや曲芸の中に取り込まれている演目である。屋外のショーには、「設置された巨大なナイフの上を歩いて渡るもの」、「火の燃えさしの上を歩いて渡るもの」、「床に仰向けに横たわった人の腹の上に3本のコンクリートの柱を積み重ねて載せ、しかもその上に数人の人が乗るもの」などがあった。

立ち寄った茶芸店で茶に関する説明を聞いた。その茶芸店では4種類の茶を販売していた。値引きはしないが、茶缶に茶をいっぱい詰めて込むサービスをする。4種類の茶とは高山雲霧茶・絞股藍（こうこらん）・苦丁茶（くうていちゃ・くていちゃ・くちょうちゃ・くうちょうちゃ）・杜仲茶である。高山雲霧茶は張家界で生産され、1000 m以上の高山で採取されるという。500 gが158元、300 gが95元。絞股藍は発酵させたもので、漢方薬としての効能もある。通常の茶とは異なり、寝る前に飲むと睡眠効果があるという。500 gが195元、300 gが118元。苦丁茶（苦丁春芽）は苦いが、後で甘さを感じるようになる。脂肪を燃焼させる作用があり、湯で何回も飲み、2日にわたって飲むことができる。苦丁茶を作る苦丁木はモチノキ科常緑の高木で、樹高が約15 mにもなるという。500 gが175元、300 gが108元。杜仲茶は杜仲の皮と緑茶を混合し、伝統的な方法で開発した茶だという。杜仲の木は5~10の高さの木で、張家界の原産であるとの説明があった。500 gが198元、300 gが119元。杜仲は樹高20 mに達するトチュウ科の落葉高木で、四川省付近に残存していたものことだと思われる。

竹繊維から作った生活用品を売っている店（土産物屋）にも行った。店の外に「香山水月観音竹林中色」の表記があった。たぶん、店名であろう。竹繊維は吸水性がある。普通の綿は水に沈まないが、竹繊維は水槽の底に沈んで行った。竹繊維で作ったタオルを、髪を洗った頭に巻いておくと、15~20分で髪が乾いてしまう。ドライヤーがいらない。このタオルは、特に若い女性には便利であろう。ハンカチほどの大きさの竹繊維の織物に油と醤油をこぼして、水洗いをして見せてくれた。洗剤を使わないで、水だけで洗うことができる。

昼食と夕食を食べたのは錦天国際酒店（武陵源区武陵大道8号）である。

武陵源ゲートのある辺りは武陵源区であるが、張家界ゲートのある辺りは永定区らしい。

IV. 永 定 区

王村（芙蓉鎮）から張家界までは110 km、約2時間半の行程である。なお、土家風情園（永定区南庄坪）から張家界荷花空港（永定区荷花村）までは8 kmほどの距離である。土家風情園には9階の楼閣がある。砂絵博物館（子午路）も永定区に位置している。夕食を食べた、砂絵博物館の隣のレストランから空港までは車で15分の距離である。

土家風情園（土司城）は土家族のテーマパークである（ここはもともと、土家族の行政・祭祀・祈祷・祝賀行事が行われた場であった）。「土司」とは、中国王朝が少数民族の支配者に授けた特別官職の総称である。ここは入場門でラッパを吹いて出迎えてくれ、祭壇の前の広場では土家族の伝統的な舞踊がなされる。山の斜面に沿って、高さ48 mの「九重天」があり、土家族の生活用品が展示されている。「九重天」は現存する最大の吊脚楼（ちょうきゃくろう）で、巨大な木造建築である。吊脚楼は川岸や山の斜面に沿って建てられており、住居の前半部分を支える木の柱は長く、後半部分を支える柱は短い。急傾斜地形へ適応した構造の建物である。宙に浮いているように見える（あるいは、水面や山の中腹に「吊り下がっている」ように

見える)ところから、「吊脚楼」と呼ばれる。吊脚楼は釘を使わないで、「ほぞ」をはめ込むことによって接合しているという。吊脚楼は土家族・苗族・白(パイ)族などの家に見られるが、伍佳氏によると漢族の家にはないという。官姐楼では「泣きながら歌う」ショーがあった。土家族の娘が結婚するときに、寝室で家族との別れを悲しんで泣き暮す(花嫁の母親と姉妹も泣く)習慣があったという。泣かなければならなかったのであろう。花嫁になる前の3日間泣き暮らしたとも、2ヶ月前から泣き始めたとも言われる。今はこの習慣は行われていない。土家族の人口は570万強。土家語には南部と北部の2種の方言がある。伍佳氏の話では、土家族の首長はたくさんいて、勢力の強い首長も弱い首長いたという。3人の首長の勢力が強く、中でも「九重天」に抛る首長の力が一番強かったという。

土家風情園から車で10分ほどのところに砂絵博物館がある。砂絵博物館は李軍声の直販画廊でもある。張家界の人である李軍声は、まだ若い。土家族の農民の子として1963年に生まれた。油絵を学んだが画材に金がかかるため、貧しい李軍声は砂や岩を顔料にした画法を思いつき、独自の方法で砂絵(軍声砂石画)を作り上げたという。下書きをし、のりを付け、そこに砂をかけるのである。李軍声が作ったのりは、接着力が強く、剥がれないという。ここでは本人の作品や弟子の作品を販売している。天然の色を生かした、砂だけではなく木の皮を用いた作品や、紙ではなく石に接着して表現した作品もある。

V. 索溪峪風景区(自然保護区)〈宝峰湖、黄龍洞〉

索溪峪は宝峰湖と黄龍洞から成る。中国は、今夏休みで混んでいる。ロープウェイやエレベーターは、乗るために4時間半も並ぶことがあるという。訪れた宝峰湖も人が多かった。宝峰湖風景区の入場料は74元。入り口を入ると高さ36mの滝がある。この滝は人工的なものらしい。滝の上に宝峰湖がある。宝峰湖は高山湖で、海拔480mの山の上にあるという。ガイドが、「宝峰湖は、半分は天然の湖である」と表現したのは、昔からここには小さい天然の湖があって、1970年代に小さな湖を人工的に大きくしたことによる。一般的には宝峰湖は人工湖と言われている。谷間に造られたダムにより、貯水された水はかつては発電や農業用に用いられていた。岩峰に囲まれた貯水池が風光明媚であることから観光地となったのである。施家峪貯水池と言っていた貯水池は、宝峰山にあることから宝峰湖と改名した。宝峰湖の平均水深は72m、最深部は119.5mあるという。宝峰湖風景区入り口から20分ほど坂(階段)を登ると宝峰湖の船着き場に到着する。坂道には駕籠屋がいる。駕籠屋の料金は距離によって違うが200元ほどだという。遊覧船は湖を30分ほどで一周する。遊覧船が近づくと、湖岸に停泊させてある船に立っている若いトゥチャ族の女性が歌を聞かせてくれる。歌の最後に「ユーウェイ(ヤーウェイともヨーウェイとも聞える)」という言葉が発するが、この言葉の意味は「こんにちは」だという。歌のあとの「ユーウェイ」には、「次の方、どうぞ」の意味もあるとのこと。トゥチャ族やミャオ族の言葉である。歌はトゥチャ族の言葉であるから、ガイドは全然わからないそうだ。前方に、孔雀に似た岩がある、とガイドが言う。ただし、似ているというのは3割ほどで、7割は想像力を働かせなければならないとのこと。上を向いたカエルの口に見える岩がある。これはマグロの口にも見えるらしいが、この岩は想像力を働かせなくてもカエルの口に見えた。笑っている仏像に見えるという岩は、いくら想像力を働かせても無理であった。サンショウウオの頭に見える岩がある。船を降りたところにある池には1.3mもあ

るサンショウウオがいる。湖のほわりには小さな舞台があり、橋がある。旧暦の3月3日の祭りでは、橋の上で若い男女が歌を歌うのだという。

VI. 天子山風景区〈袁家界、天子山〉

天子山風景区に入るのには指紋カードを購入しなければならない。ところが、指紋を登録するための機器が私の指紋を読み取らなかった。右手親指の指紋の読み取りが不能であったため、人差し指、中指と指を変えて読み取らせようとしたけれども、すべて不能であった。やむをえず、妻のカードには妻の右手親指の指紋を登録し、私のカードには妻の右手人差し指の指紋を登録した。指紋登録済みの入場カードは本日だけでなく、明日も張家界国家森林公園に入場する際に使用するの、どの指の指紋を登録したのか忘れないようにしなければならない。入場時、カードを機器に通し、同時に指紋照合のチェックを受けるのである。どの指の指紋なのかを忘れると、チケット代245元をまた払うことになるかもしれない。天子山風景区と張家界国家森林公園の共通入場料は245元である。

天子山は桑植県に位置しているようである。しかし、天子山にある賀龍公園は武陵源区に位置すると表記したものもあり、観光スポットが張家界の行政区画のどこに位置しているのか、よくわからない。

30分ほど待って、6人乗りの天子山ロープウェイに乗った。料金は52元。10分ほどで到着する。ゴンドラのドアは自動開閉になっている。到着したところは海拔1262mの高さである。ロープウェイを降りると賀龍公園がある。「賀龍公園」と表記した碑の文字は江沢民が書いたものである。江沢民以外の人物が書いた碑は、ガイドは見たことがない（この地では）という。賀龍公園という名前がついているが、賀龍は特に天子山とは関係が無いらしい。しかし、地元の張家界の出身である。賀龍（1896～1969）は軍人（元帥）で、1954年国務院副総理になったが、文化大革命で失脚した人物である。賀龍公園には展望の場でもある天子閣がある。天子閣は深圳（シェンチェン）人民政府が費用を提供して造ったものである。天子山の名称は向王天子向大坤の名にちなむというから、天子閣の名称もそう考えてよいであろう。土家族の指導者向大坤（1328～1385）は自治を求めて反乱を起こしたが、明朝軍に追い詰められて天子山の崖から身を投じて自殺したという。向大坤は農民を結集して武装蜂起をする際に、「向王天子」と自称したのである。

観光地には「物乞い」がいる。中国には準警察組織である「都市管理」があるが、今のところ「物乞い」の存在について、「都市管理」は沈黙しているようである。

岩峰には名前が付けられており、武士訓馬などというのものもある。想像力を働かせて何に見えるのか考えなければならないが、兜や鼻に見えるとして「武士訓馬」と称しているという。まさに想像の世界である。林立する岩峰は崩落するのではないかと思われるが、ガイドの話では、あと1億年は崩落せずに残ると言われているという。湖南省は地震の少ないところである。岩峰は雨（水）による浸食でできたと考えられる。風は強くないので、風の影響はなさそうである。

袁家界にある天下第一橋の近くにある手すりにはたくさんの錠前（鍵）が吊るされている。これは、夫婦が決して別れない誓いのしるしだという。あるいは若い男女の恋が永続するようにという祈りが込められたものだという。

迷魂台は、魂が迷ってしまうようなところ、だという意味で名付けられた。

百龍エレベーターは、326 m の高度差を運行するエレベーターで、326 m を 1 分 58 秒で移動する。エレベーターの料金は、片道 56 元。326 m のエレベーターを 2 段目のエレベーターとすると、わずかに離れたところに 32 m の高度差の 1 段目のエレベーターが、下方にある。

VII. 張家界国家森林公园〈黄石寨、金鞭溪〉

ロープウェイの黄石寨山頂駅は海拔 1092 m。8 人乗りのロープウェイの料金は片道 50 元、往復 96 元。

漢時代、劉邦の部下である張良がここで黄石公と呼ばれた老人に救われたという伝説があり、その伝説にちなんでここは黄石寨（こうせきさい）と名付けられたという。劉邦の軍師であった張良は、世俗を見限り官を辞して遁世し、張家界に来た。その際、官兵に追われたけれども、この地で黄石公に助けられ難を逃れたというものである。

今のような観光地になる前、1988 年にユネスコから環境問題について指摘を受け、それまでであった多くの山中の宿泊施設などが撤去されたという。環境を優先するという理由で村人が追い出され、村が消失させられたのかもしれない。

山上には六奇閣（ろっきかく）という 4 階の楼閣（展望台）がある。「六奇」とは「山奇」「水奇」「石奇」「雲奇」「植物奇」「動物奇」の、6 つの珍しいもののことであろう。「奇」には「珍しい」という意味がある。

展望台の摘星台は、プールの高飛び込み台のような狭い岩場で、人が群がっている。伍佳氏によると、門の形をした岩、双門迎賓は朱鎔基が名付けたものだという。しかし、あれは毛沢東が名付けたのだという人もいて、どうもよくわからない。

金鞭溪（きんべんけい）には金鞭魚がいる。金鞭溪は 7.5 km ほどあるらしいが、森林浴のできる遊歩道は 5 km ほどらしい。母子峰（ぼしほう）と呼ばれている岩峰は、大小の岩峰を母子に見立てたものである。母親が子供を抱いている姿を想像しなければならない。せせらぎに設けられた吊り橋は、はしゃぎながら全員で揺すって渡っているグループを見ることが多い。金鞭岩は太陽の光があたると金色に輝くと言われる。350 m の高さがあり、東京タワー（333 m）よりも高い。金鞭岩の隣には「神鷹護鞭」と呼ばれる岩峰がある。鷹（あるいは鷲）が羽を広げて雛を守るように見える岩峰が、金鞭岩を守っているとされている。溪流を挟んで金鞭岩の反対側の遊歩道に巨石がある。1976 年に、落下したものだという。自然現象によるものだが、この年には毛沢東など重要人物が 3 人も死去した。人の死と巨石落下を因縁があるごとく思う人もいるという。1976 年は激動の年であった。1 月 8 日に周恩来死去、7 月 6 日朱徳総司令死去、9 月 9 日毛沢東主席死去。毛沢東が死ぬ前の 7 月 28 日にはマグニチュード 7.5 の唐山（とうざん）大地震が発生（震源は河北省唐山市付近）し、唐山市は壊滅状態となった。当時、中国は文化大革命の最中で、政府は、復興は自力で行うとして外国の援助を拒否した。このことが被害をより大きなものとしたと考えられている。10 月には四人組が逮捕されて、10 年に及んだ文化大革命が終了した。

金鞭岩のあたりは西遊記のロケ地になったところである。「花果山」「水簾洞」がその舞台になったところだという。中国では西遊記のロケ地は 18 か所以上あると言われ、金鞭溪もその一つなのである。

劈山救母（へきざんきゅうぼ）と呼ばれる岩はウサギにもトトロにも見える。トトロというのは日本のアニメーションに出てくる“もののけ”と呼ばれる不思議な生き物のことである。中央が裂けた巨大な岩である「劈山救母」の名前の由来は、「母親が天上の法に触れ、山麓に埋められてしまったのを、沈香という名の子供が斧で山を切り開き母親を救った」という伝説による。

VIII. 鳳 凰

張家界（市街地）から鳳凰までは 250 km、車で 5～6 時間の距離である。鳳凰県は湖南省湘西トゥチャ族ミャオ族自治州に位置する。高速道路を建設中だが、まだできていない。張家界公園門から車で 10 分ほどのところにある毛姐酒店（武陵源区金鞭路）で昼食をとった後、鳳凰に向かった。中国人はシートベルトをしない人が多いらしく、我々の乗ったバスには使えない状態のシートベルトもあった。山道を移動するので、我々はシートベルトを装着した。途中利用した、観光バスを止めるところにある公衆トイレ（観光客用と思われる）は料金が 1 元であった。しかし、個室にドアはなく、空港やホテルのトイレとは全く違っていた。

道端でキウイを売っている。キウイは今は収穫期で、このあたりはキウイの産地になっている。湖南省全体では、果物の中ではみかんの生産が一番多いらしい。

宿泊したのは天下鳳凰大酒店（鳳凰県城鳳凰路 1 号）である。朝食券に部屋番号を記入してあるが、「部屋番号」が記入してあるだけで、「自分の部屋番号」と一致しているわけではない。

南方長城はホテルからバスで 15～20 分の距離にある。長城の建築材料は土や石であるが、近隣住民が長城の石を持ち去って自分の家を造るなどのこともあったらしい。明代、1554 年に建設を始め、1622 年に完成したという。明は 1616 年に滅亡し、後金が建国された。後金は 1636 年に国号を清と改称している。この長城は明と清の統治者が苗族の攻撃を防ぐために築いたものである。長城の一部は苗族が封建政府に対抗するために築いたとする説もあるようだが、巨大な土木事業にかかる経費などを考えると、首肯するわけにはいかない。長城の歴史は 500 年に満たないが、南は貴州省の銅仁から北は吉首まで総距離 380 km あったと言われる。2001 年に修復され、7.5 km が整備されたとのこと。南方長城入口から東門城楼前の石畳広場までは石段が 200 段あるという。実際にこの石段を数えた同行者の話では、200 段ではなく 175 段であったとのこと。広場には碁盤の目が作成されている。超大型の、この囲碁盤は黒服と白服を着て頭に笠をかぶった子供を碁石に見立てて勝負を行うのだという。広場に隣接して、昔の長城の遺跡がある。石畳広場から上がって再び石畳広場に下りてくる周回コース（階段道）は、石段が 1200 段あり、25 分ほどでまわれるらしい。中国では、この南方長城は古代に造られたことになる。中国の歴史区分では、最後の王朝である清までが古代とされているのである。1912 年の辛亥革命による中華民国からが近代で、1949 年の人民共和国の成立から後が現代である。伍佳氏の話では、大学の歴史科ではもっと詳しく区分するというところから、大学の歴史科における区分であっても、基本は変わらないということであろう。

鳳凰古城はホテルから徒歩で 15～20 分の距離にある。鳳凰古城は、清の時代に建てられた、300 年ほどの歴史のある構築物だということ。ここは生姜飴が有名で、作っているところを見ることができる。南門の近くにある文化広場の「鳳凰」のモニュメントは、街のシンボルで観

光用に作られたものである。「鳳凰城」という碑の文字は朱鎔基が書いたものである。

ここには沈従文（しんじゅうぶん、1903～1988）の故居がある。ここで、高島俊男（中国研究者）の沈従文に関する記述を引用しておく。「一九四九年に中華人民共和国ができた時にはまだ四十代で、環境さえ許せば、これから成熟期、という年であったのだが、共産党支配のもとで、作品を書くことが許されぬのはもとより、ずっと半拘束状態がつづき、特に一九五七年の反右派闘争以後はひどい批判と抑圧を受けて、屈辱にたえ切れず自殺を図ったが未遂に終わった。一九六六年からの文化革命中は五七幹部学校（知識人の強制収容所）に入れられていた。一九七六年に毛沢東が死んで、文革が終わって、やっと身柄を解放された。一九七八年に・・・会わせてくれた。場所はたしか北京大学だったと思う。一九〇三年（まだ清帝国の時代、日本で言えば明治三十六年）の生まれだから、その時七十代半ばですね。しなびた小さなお爺さんになっていた。三十年間痛めつけられて、全然精気なし。共産党の指導のもとで、昔の服飾の研究をさせてもらっている、と言ってました。あの才能あふれる作家が古代服飾の研究ですよ」⁽⁴⁾。沈従文の有名な小説に、「辺城」がある。沈従文故居は、かつて沈従文が暮らしていた場所で、200年ほど経った家だという。伍佳氏によると、沈従文のお祖父さんが建てたとのこと。伝統的な建築の四合院である。中央に中庭があって、それを囲むように寝室や住居スペースがある。沈従文は鳳凰県の軍人の家庭に生まれ、漢族として育った。湘西は漢族・苗族・土家族が雑居しており、沈従文の父方の祖母は苗族であり、母方は土家族であったという。沈従文は漢族と少数民族との混血であった。沈は背が低く、ベッドも小さめであったという。

東門があり、熊希齡（ゆうきれい、1869～1937）の故居がある。熊希齡故居も四合院式の建物で、中庭に防火用水を入れた金属製の桶（大きな釜の形をしたもの）を置いてある。熊希齡は民国時代の国務総理であった。

北門があり、飛び石がある。高さの異なる2種類の（ブロック）石が2列に一定の間隔で並んでいる。これは飛び石を並べた橋で、「跳橋」というらしい。跳橋は対岸に渡る手段として日常的に使用されている。飛び石そのものが、足を載せるのに狭すぎるといほどではないし、川も深くないので、恐怖感を覚えることはない。飛び石近くの沱江（たこう）の岸では、数人の洗濯する人の姿を見かけた。跳橋から10mほど離れたところには、木橋がある。幅は飛び石2列分と同じぐらいで、手すりもない。

沱江では10人乗りの小さな手漕ぎ舟に乗った。30分ほどの沱江下りでは「土家吊脚楼」を眺めながら、虹橋をくぐって行く。虹橋はアーチ型の橋桁の上に楼閣を思わせる建物が建っていて、その内部は土産物屋となっている。虹橋をくぐると万名塔がある。沱江下りでは船頭が歌を歌ってくれる。この歌を「号子」というらしい。「号子」とは「力仕事をする際の掛け声や歌、舟歌など」のことである。「号子」の最後には、やはり「ヨーウエイ」という言葉を発した。

昼食を食べた隆源山寨（鳳凰県虹橋路）から「鳳凰」のモニュメントのある文化広場までは徒歩で15～20分の距離である。「鳳凰」のモニュメントに行く途中の店先で、蛇が一匹とたくさんのカエルの入ったかごを、いくつか見かけた。伍佳氏によると、「かご」を置いてあるところはレストランで、かごに入っている蛇は草を食べる蛇だろうという。古城の入口には県政府の建物がある。古城は夜8時からライトアップするという。

天下鳳凰大酒店の前に、車体に「工商行政管理」と書いた、白と濃いブルーの、パトカーの

ような車が停っていた。「工商行政管理」は警察ではないが、準警察組織でビジネスに関する管理をしているらしい。

IX. 王村（おうそん、湖南省湘西トゥチャ族ミャオ族自治州永順県王村）

鳳凰から王村までは車で3時間ほどの距離である（王村は張家界と鳳凰との中間にある）。途中の吉首の町までは、鳳凰から1時間40分ほどであった。王村から張家界までは2時間半ほどである。王村は、1987年製作の映画「芙蓉鎮」の撮影が行われたところで、正式名称「王村」よりも「芙蓉鎮」の方が有名になってしまった（2007年に芙蓉鎮に改名したという説もある）。映画の影響で有名になったのは「芙蓉鎮」の名称と、ヒロインが作る「米豆腐」である。「芙蓉鎮」は、「商売で成功した若夫婦が文化大革命の犠牲となり、店と夫を失ったヒロインが同じ罰を受けていた青年と恋に落ちていく」という一人の女性の耐え抜く姿を通して文革の問題点を指摘した作品である。

芙蓉鎮は石畳の坂道に沿って街が広がっている。土産物屋の並んでいる中に、映画「芙蓉鎮」のヒロイン胡玉音の店として使われた米豆腐の店がある。米豆腐はスイトン状の食べ物である。脇に入ると上下2段に分かれた滝がある。上段の滝の、落ち口の上流の流れが緩やかなところに、飛び石造りの橋が設置されていて対岸に渡れるようになっている。また、滝の裏側は通り抜けることができるようになっている。この滝は街並みに沿って流れる盤溪という川にあるらしい。盤溪の水は滝壺を経て、酉水（ゆうすい）という川に流れ込んでいる。盤溪の向こうには土王行宮がある。土王行宮は土家族の首長の居場所であった宮殿で、斜面に沿って造られた吊脚楼である。建物内部には古い家具の展示があり、玉座のようなものの頭上には水牛の頭の骨が飾られている。

X. おわりに

中国は1990年代後半から（10～15年前から）、急激に変化した。マンションが建ち、道路が整備され舗装された。それまでの張家界の道路は整備もされておらず、空港もなかった。張家界荷花（かか）空港が開港したのは1994年8月のことである。10年前に長沙では1平方メートルあたりのマンションの値段が2000元ほどであったのが、今は7倍になっており、1平方メートルあたり1万5千元が平均的な値段だという。住居の値段として考えれば、20万であったものが150万円になったわけである。伍佳氏の1年間の収入は、およそ5万元だという。今、70万円の（狭い）マンションを購入するとしたら、頭金が3割として25万元用意し、20年のローンを組んだとして月々4000元支払わねばならないという。家のローンは低い利率のものでも7%とのこと。しかも、マンションを購入しても実際に入居するには平均2年を要するという。建築中に購入するのだが、中国では建物の外部ができた段階で引渡しを受け、内装は自分の費用で行わなければならない。内装に10万元ほどかかり、内装に2年ほどかかることもあるという。伍佳氏の場合、月々4000円の支払いをすればそれだけで収入のほとんどを持っていかれることになり、とうてい生活できないという。今の収入であれば30年のローンを組まざるを得ないことになる。住宅の土地の使用権は70年、商業用地の使用権は50年であるから、土地の使用権の70年後あるいは50年後のありように不透明感

がある。賃金は10年前に比べ、1.3倍ほどしか上がっていないが物価は3~4倍になっており、10年前よりも生活はきついと伍佳氏は言う。

張家界には市区から南へ8 kmほどのところに天門山（海拔1518.6 m、張家界最高の山）がある。ロープウェイが、張家界市の中心にある城市公園と天門山山頂の原始空中花園とを結んでいる（ロープウェイの全長7455 m、高低差1279 m、乗車時間30分）。このロープウェイは、一筋の虹が人間界と天上界を結んでいるかのようだ、と形容される。山頂付近には天門洞と呼ばれる大きな空洞（高さ131.5 m、幅37 m、奥行30余 m）がある。この空洞は三国時代（263年）にあった強い地震によってできたという。

長沙市の中心から約8 kmの位置にある馬王堆漢墓（まおうたいかんぼ、紀元前2世紀）から1972年に発掘された女性（初代軼侯〈たいこう〉利蒼の妻、辛追）は生けるが如き状態だったという。遺体は棺を満たす液体に浸っていて、皮膚組織が弾力性を残していたとのこと。

今回の旅行では湖南省まで来たものの省都である長沙にも、張家界にある天門山にも行くことができなかった。また機会を改めて訪れてみたい。

注

- (1) 高島俊男、漢字検定のアホらしさ、連合出版、2010、P.56~57